

# 「いいね！」が席卷する SNS の世界

## ～不適切投稿の背景にあるもの～

筑波大学人文社会系教授

土井 隆義

### 1. リアルとネットの表裏一体化

ツイッターなどの SNS に投稿された不適切な文章や写真が、ネットのユーザーから集中砲火を浴びて炎上事件を招いたり、あるいはその内容に関わる人びとに多大な迷惑をかけたりといったトラブルを引き起こしてしまう事例が、数年前からしばしば目につくようになってきている。国家官僚がツイッターで不用意な「つぶやき」を発して問題化した例などもあり、トラブルを引き起こす者はあらゆる年齢層に見られるから、これは若者だけの問題ではない。しかし、ネットのヘビーユーザーが若年層に偏っていることもあって、トラブル・メーカーが若年層に多く見られるのもまた一つの事実である。

たとえば、ある若者がアルバイト先の店内で商品の陳列棚にふざけて横たわった写真を撮り、それをツイッターで発信してしまった事件では、その店舗は閉鎖廃業にまで追い込まれた。この事例のように、投稿者自身は仲間内でのウケを狙っただけのつもりでネット上に載せた情報が、世間一般の人びとの間にも知れわたり、多大な損害を関係者に与えてしまうケースが増えている。このような「意図せざる結果」への不用意さに接すると、ここには現代の若年層の特徴も投影されているように思われる。

今日、ネットを駆使する若年層には、自分の書き込みを少しでも多くの仲間に見てもらいたいという承認願望の強さが見受けられる。しかも、その仲間として彼らがイメージしている相手の多くは、ごく身近で生活圏を共にしている人たちである。ネットとは、時空間の制約を超えて多様な人間がつながることを可能にした装置である。しかし、また同時に、身近な相手とのつながりをさらに濃密にする装置としても機能しうる。とりわけ今日の若年層では、後者の目的でネットを利用している者が圧倒的に多い。

ネット空間にアクセスするために、今日の若年層が駆使する装置の多くは、ケータイやスマホなどのモバイル機器に偏っている。もちろん PC を使いこ

なす者も存在しはするが、その比率は低い。そこで、NPO 法人「子どもとメディア」が小中高生を対象に一昨年実施した調査から、ケータイとスマホの使用時間を算出してみると、当然ながら年齢が上昇するにつれて増えていく傾向にあるものの、13歳と16歳に突出した山があることに気づく。前者は「中学デビュー」、後者は「高校デビュー」にあたる年齢である。どちらも学校での人間関係がまだ流動的な時期であるため、お互いにモバイル機器を駆使して友だち獲得競争に励んでいるのだろう。

このような事実から分かるのは、今日の若年層にとって、リアルとネットは別世界ではなく、地つながりになっているという点である。東京広告協会は、若年層による SNS のこのような使われ方をもじって、「そこらへん・なまかうち・サービス」と皮肉交じりに形容している。そこで本稿では、近年の不適切投稿の背景に潜んでいる問題を、ネットという新しい装置の特徴からではなく、今日の若年層に見られる心理的な側面の特徴から捉え直してみたい。

### 2. 不安が加速するつながり依存

今世紀に入る直前、コミュニケーションの便利なツールとして、若年層の間で爆発的にヒットした電子機器があった。ポケベルである。当時の高校生たちは、わずか12文字しか表示されないこの装置を駆使し、自分の思いを電波に乗せて伝えあっていた。もちろん、その相手には学校の友だちも含まれてはいたが、いわゆる「ベル友」として彼らが切実に求めたのは、むしろリアルには出会うことのない相手だった。「インティメート・ストレンジャー(親密な見知らぬ人)」という言葉が示していたように、見知らぬ相手だからこそ、自分の内面をさらけ出せると感じ、そこに本音で話せる相手を見出していたのである。ポケベル網もネットの一種とみなすなら、当時のリアルとネットは別世界にあったといえる。

ところが、「子どもとメディア」の調査によれば、

今日では「ネット以外に自分の居場所がある」「ネット以外に熱中していることがある」「人間関係に恵まれている」と答えた生徒のほうが、そうでない生徒よりもケータイやスマホの使用時間はいずれも長い傾向がうかがえる。ネットの世界で彼らがつながっている相手の多くは、学校でリアルな日常を共にしている仲間であり、その関係を円滑にする道具としてネットが駆使されているのである。よく実態を知らない大人たちは、リアルな生活が充実していないから、ネットの世界に耽溺してしまうのだろうと考えがちであるが、それは大きな勘違いである。

ここで改めて考えてみなければならないのは、今日の若年層に増えているといわれるネット依存の内実についてである。依存と一口にいてもその中身は様々であり、SNSやメールなどを介した他者との交流にのめり込む者もいれば、オンラインゲームや動画などのネット上に溢れる多彩なコンテンツの魅力にはまってしまう場合もある。さらに、前者のつながり依存の中には、ネット上のバーチャルな関係に依存する場合と、リアルな関係がネット上に延長される場合とがあり、両者では性質が違う。

ネット依存の程度を測ろうとするとき、今、世界で最も利用されているのは、米国の心理学者であるキンバリー・ヤングが開発した尺度だろう。ヤングは、ギャンブル依存の診断基準を元に、この尺度を開発した。このことから推測されるように、基本的にこの尺度は快楽型の依存を想定して考案されている。したがって、ネット依存の中でもコンテンツ系の依存については、この尺度は確かに有効である。たとえば、パチンコ中毒者が自分の意志で嗜癖を止められないのは、脳内で快楽ホルモンのドーパミンが分泌されるからだというのが、ネットのゲームや動画などでも同様のメカニズムを指摘できるだろう。

しかし、欧米とは違って、日本の若者が陥りがちなのはつながり依存のほうである。しかも、リアルな関係を円滑に保つためにこそ、ネットが駆使されている。このとき、ネットに常時接続されたモバイル機器を彼らが手放せないのは、快楽に押し流されてのことではない。むしろ逆に、不安に駆られてのことが多い。たとえば近年は、コミュニケーション・アプリであるLINEの利用者が急激に拡大し、そのサービス機能の一つである「既読」表示によって、四六時中メッセージをチェックし続ける中高生も目

立つようになっている。その結果、「LINE疲れ」と呼ばれる状況に追い込まれる者も増えている。

このような状況に追い込まれながら、それでも彼らがネットへの接続を遮断できないのは、学校での交友関係から自分だけ外されるのではないかと不安に駆られるからである。不安や緊張が高まったとき、脳内で分泌されるのはドーパミンではなく、ノルアドレナリンである。比喩的にいえば、日夜ネットへの接続に励む日本の中高生の脳内には、おそらくこのストレス・ホルモンが満ちていることだろう。

このような観点に立ってみると、快楽型の依存を前提に作られたヤングの依存尺度は、日本の若年層におけるネット依存の実態を探るにはそぐわないものであることが分かる。この尺度を使った日本の若年層の調査では、その結果に安定性がなく、きわめて使いづらいという評判をよく耳にするが、それはこのような背景があるからなのである。

### 3. つながりのリスク化と格差化

ところで、LINEの「既読」表示は、東日本大震災時の経験から、受信者がいちいち返事を出さなくても、メッセージを読んだことが送信者に分かるように考案された機能である。しかし、若者たちの多くは、むしろ「既読」表示があるからこそ、返事をすぐに送らないと相手に悪いと感じ、不安に駆られてしまうという。ここには、このアプリの開発側の想定から見事なまでに反転した心理状態が見受けられる。これはいったい何故だろうか。

日本の社会学者の共同研究グループ、青少年研究会がおこなってきた「都市在住の若者の行動と意識調査」によれば、10年前と比較して今日の若年層の友人数は大幅に増えている。16歳から19歳までを抽出して集計してみると、2002年の調査では平均66人だったものが、2012年の調査では平均125人へと倍増しているのである。ここに近年のネットの普及が寄与していることは間違いない。この調査で尋ねている友人には「親友」「親友以外の仲のよい友人」「知り合い程度の友人」の3つのカテゴリーが含まれているが、増加率をもっとも激しいのは三番目の「知り合い程度の友人」だからである。

しかし、友人数が激増した理由はそれだけではない。なぜなら、平均値が上昇すると同時に、回答者によって友人数に大きなばらつきも生じるように

なっているからである。調査年度によって散らばりにどの程度の差があるかを比較するため、標準偏差を平均値で割った変動係数を求めてみると、2002年には0.78だったものが、2012年には1.54になっている。今日の若年層の間では、友人数の増加と共に、その格差化も進行しているのである。

今日の中国において、急激な経済成長と同時に凄まじい格差化も進んでいる状況を眺めてみれば明らかのように、経済の自由化は所得水準を上昇させると共に所得格差も拡大させる。それとまったく同じ事態が、日本の若年層の人間関係にも生じている。友人数が増えた理由の一端は、彼らの人間関係の流動性が増したことに起因しており、それが同時に関係の格差化も招いているのである。

じっさい、この調査によると、現在の若年層のほうが、友だちをたくさん作るように心がけている者ほど友人数も多い傾向がうかがえる。両者の相関度が今日のほうが高いということは、それだけ既存の組織によって友人関係が定まる比重が低下していることを示している。社会制度によって友人関係が縛られなくなった分だけ、個人の姿勢の比重が増すことになるからである。その機序は、先ほど指摘した「中学デビュー」や「高校デビュー」で起きていることを想起してみれば分かりやすいだろう。

このように、人間関係の流動化が進めば進むほど、そのリスク化も同時に進行していく。制度によって友人関係が縛られないということは、裏を返せば、制度によって友人関係が保証されないことでもある。付きあう友人を勝手に選択できる自由の増大は、相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクの増大と不可分である。かくして、学校や職場などの環境において、たまたま気の合う友人関係に恵まれた者と、そういった出会いに恵まれなかった者との間で、友人数の格差が大きく広がっていく。

ところが、いわゆるコミュニケーション能力なるものが偏重される今日の社会では、人間関係の築かれ方もまた、そういった個人に内在する能力によって左右されるかのような錯覚が生じやすくなっている。友人数の多寡についても同様で、それを偶然の産物としてではなく、個人の能力の産物とみなす傾向が強まっている。かくして、その数が多いか少ないかによって、人間としての価値が測られるかのような錯覚が広がっていくことになる。

#### 4. 人生の羅針盤としての友だち

人は、他者との間にさほど差を見出せないとき、そこに評価の尺度も見出そうとしない。しかし、いったん格差が生じると、それは評価の物差しとして機能しはじめる。友人数についても例外ではなく、数の落差が歴然と目につくようになると、その数が多いか少ないかによって、人間としての価値が測られるかのような感覚が生じてくる。人間関係に対して過敏になり、そこに大きな不安を抱えやすくなった背景には、このような事態の進行を読み取れる。じっさい、上記の青少年研究会の調査によれば、友人数が多い者ほど自己肯定感も高く、自分の将来も明るいと考える傾向がうかがえるのである。

また、内閣府が5年おきに実施している青年意識調査によれば、友人関係に充実感を覚える若者たちは、1970年代以降ずっと増え続けている。先ほど指摘したように、価値観の多様化が進んで人間関係の自由度も増した結果、既存の制度や組織によって不本意な関係を強制されることが減ったからだろう。たとえ同じ組織の一員であっても、気が合わなければ無理して付きあう必要などない。そう考える若年層は、かつてより確実に増えている。

当然、その関係に対して不満を覚える者は減るだろう。事実、同調査によれば、そこに悩みや心配を感じると答える者も一時は減少していた。ところが、2000年以降になると、その傾向が反転し、再び増えはじめることになる。人間関係の流動化が急激に進んだ結果、むしろそこに強い不安を覚えるようになったからである。人間関係への不満の減少分を凌駕するほど、その不安が増大してきたのである。

しかし、今日の若年層が人間関係に対して過敏になってきた理由はそれだけではない。そもそも彼らが既存の制度に強く縛られなくなり、人間関係の流動性が高まったのは、彼らの価値観が多様化したからである。ところが、価値観の多様化によって様々な選択肢が横並びになると、かつてのような信念や信条を内面に持つことが難しくなってくる。

かつての若年層が、成長と共に自らの内面に信念や信条を確立させやすかったのは、彼らが自分が勝手に思い込んだものでなく、社会的なコンセンサスによって支えられていると感じられたからだだった。だから、周囲の他者の反応をそれほど気にかける必要もなく、いわば「我が道」を突き進むことも比

較的に容易だった。たとえ今は周囲の人たちに自分の行動が理解されなくても、そこに普遍的な根拠がある以上、いずれは分かってもらえるはずだと、素朴に期待をかけることができたのである。

しかし、今日のようにあらゆる選択肢がフラットに横並びになると、どれを基準にしてもそこに普遍的な根拠を求めることは難しくなる。自分の選択に少しでも不具合が生ずると、別の選択肢にしておけばよかったかもしれないとたちまち不安に陥ってしまう。そのため、今日の若年層は、かなり年長になってからも、具体的な評価の物差しを周囲にいる人びとの反応に求めざるをえなくなっている。もとより自分の生き方をこれから模索していかなければならない若年層にとって、仲間からの評価は大人以上の重さを持っているが、近年はその傾向にさらに拍車がかかっているのである。

ところが、現在の若年層は、まさにその価値観の多様化によって、人間関係がいったん傷ついてしまうと、それを修復することは不可能に近いと感じるようになってきている。友人との関係を円滑に維持することに必死になり、そのためにネットも駆使せざるをえないのは、このような事態が進行しているからでもある。欧米のような一神教の国でもなく、また世間からの評価も安定性と一元性を失った現在の日本では、自分を評価してくれる仲間の存在こそが、自尊感情を支える最大の基盤であり、またその仲間からの反応こそが、自らの態度決定に有効な羅針盤であると感じられるようになってきている。だから、その関係が損なわれることに対して強い不安を覚え、ネットへの常時接続からも逃れられないのである。

## 5. 内閉化する人間関係の病理

昨今のネット環境の普及によって、若年層の間で人間関係の希薄化が進んでいるという批判もしばしばなされる。しかし、このように見てくると、少なくともその指摘の半分は間違いである。いつ何処にいても常時接続が可能となったことで、むしろ人間関係の濃密化が押し進められているからである。

ただし、彼らが日常生活でつねに行動を共にしている仲間とは、友だちの獲得競争が熾烈を極める今日の社会を、何とか無事に生き抜くためのセーフティ・ネットとしての側面が強い。彼らは、そのよ

うな仲間をイツメン(いつも一緒のメンバー)と呼ぶ。それは、たとえば学校での休憩時間に一人にならないように、とりあえず掛けておく保険のようなものである。だから、それは必ずしも心を許しあえる間柄ではない。それがリア充(リアルな生活が充実している)と彼らが呼ぶ人間関係の内実である。

学校などの日常生活の場面で、自分だけが孤立しないための保険であるイツメンは、日頃から掛金ならぬ配慮を払っておかないと維持が難しい関係である。特定の相手との抜けがけは許されず、つねに仲間全体の動向を気にかけていなければならない。そこへ時と場所を選ばず、常時接続が可能なモバイル機器が使われるようになり、付きあいの場が対面状況に限定されなくなった。そのため皮肉にも、腹を割って話せるような親友を見つけることは、今日ではかえって難しくなっている。先ほどの批判が間違いなのは半分だけだと述べた理由はここにある。

このように見てくると、SNSで不適切投稿が行われやすいのも、内輪での関係の維持に躍起になっているため、その外部への影響にまで気を回す余裕がないことの表れとして捉えなければならないことが分かる。仲間内で相手の反応を24時間ずっと確認しあっていなければならないので、その外部の人間にまで注意を払うだけの余裕が残されていないのである。内輪ウケを狙うことに必死になっており、仲間の注意を少しでも多く引こうとするあまり、つい不用意な書き込みをしてしまうのである。

流動化の進んだハードな環境を生き抜くための防壁として、ネットで常時接続された社会的な関係も、現在では必要なのかもしれない。そのおかげで、とりあえずは孤立の恐怖から解放される。しかし、表面的に「優しい関係」を演じあうことに多大な時間と労力を費やすあまり、お互いの内面理解へと深まっていくことはかえって難しくなっている。

だとしたら、現在の若年層にとって必要なのは、昨今の風潮のように人間関係の強固な絆づくりへと煽り立てられることではない。その傾向に逆にブレーキをかけ、人間関係を外部へと開かせることで、イツメンへの依存度を下げていくことが必要である。あるいは、身近なイツメンの中にも多様性が潜んでいることに気づかせることが必要である。不適切投稿の本質は、ネットの側にはではなく、日常の人間関係の側にあると気づかなければならない。